

7月第4週の礼拝説教

■日 時：2024年7月28日（日）10：30～11：30 聖霊降臨節第11主日礼拝

■説 教： 保科けい子牧師

■聖 書：新約：ヨハネによる福音書6章41～59節（P176）

■説教題：「主は命のパン」

■讃美歌：141（主よ、わが助けよ、いつの世にも）

56（主よ、いのちのパンをさき、）

主イエスは、本日の聖書箇所6章41節で「わたしは天から降って来たパンである」とお語りになりました。そのことは、6章1節以下で記されている「五千人に食べ物を与える」というパンの奇跡を見て、主イエスのもとに集まって来た人々に向かって主イエスがお語りになった言葉、6章32, 33節の「わたしの父が天からまことのパンをお与えになる。神のパンは、天から降って来て、世に命を与えるものである」と重なります。そこで、人々が「主よ、そのパンをいつもわたしたちにください」と求めると、主イエスは、「わたしが命のパンである。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴くことがない。」とお答えになったことが6章35節で記されています。これを聞いたユダヤ人たちがつぶやき始めた、というところから本日の箇所が始まります。

最初に注目していただきたいのは、41節で何気なく「ユダヤ人たちは」と語り出されているところです。これまで主イエスを追いかけていたのは、大勢の群衆のはずでした。ところが、ここではその群衆のなかでつぶやき始めた人々を特に「ユダヤ人たち」と記しているのです。もちろん、「ユダヤ人たち」という表現はヨハネによる福音書の1章19節から出てきていますので、聖書の世界では一般的な言い方であると思ってしまうところです。ところが、ヨハネによる福音書では、この「ユダヤ人たち」という言葉で表現される人々を特別な存在として描いているのです。それは5章16節の「ユダヤ人たちはイエスを迫害し始めた。」から始まっており、続く5章18節には「このために、ユダヤ人たちは、ますますイエスを殺そうとねらうようになった。イエスが安息日を破るだけでなく、神を御自分の父と呼んで、御自身を神と等しい者とされたからである。」と記されているように、主イエスに敵対し主イエスを十字架の死に追い込んでいく決定的な存在として登場しているのです。彼らは、本日の箇所6章42節で「これはヨセフの息子のイエスではないか。我々はその父も母も知っている。どうして今、『わたしは天から降って来た』などと言うのか」とつぶやき始めました。6章の舞台はガリラヤ、つまり主イエスが育った地で、つい最近までその地の人々と日常の付き合いをしながら生活しておられたと思われまます。ですから、以前からイエスのことを知っている人も多かったのです。その普通の人物が、ある時、突然に神の国の福音を宣べ伝え始め、病人を癒したり、五つのパンと二匹の魚で五千人の人々を満腹にしたりするという奇跡を行い始めたのです。そして「わたしは天から降って来たパンである」と語ったのです。それで彼らは、「あのイエスが天から降って来た者であるはずはないだろう」とぶつぶつ言い始めたのです。

ところで、私たちは主イエスやその両親のことを直接知っているわけではありません。ですから、ここでのユダヤ人たちとは立場が異なるのですが、彼らがひそひそとつぶやいていることには共感できる点がある、と思うのではないのでしょうか。主イエスの教えはすばらしいし、弱い者や貧しい者と共に生きたその歩みは見倣っていききたい、だから人間イエスを尊敬しその生き方を手本として歩もうというのは納得できるし、自分自身もそのように信じて信仰者となってこれまで過ごしてきた、というのが現実かもしれませぬ。そのような時に、イエスご自身が「わたしは天から降って来たパンである」と言われたというみ言葉に出会えると、正直なところ、そういうことはあまりに荒唐無稽で信じられないし受け入れることは難しい、と思うのではないのでしょうか。言い換えれば、人間イエスを尊敬し、イエスが歩んだように生きようということだけではどうしていけないのか、その方がよほど分かりやすいし受け入れやすい教えだ、そのように思うことが私たちにもあるのではないのでしょうか。けれども、ヨハネによる福音書は、その書き出しである第一章から、主イエス・キリストは人間となった神である、ということを宣言し繰り返し語っているのです。本日の聖書箇所では、主イエスが主なる神御自身であることを示す言葉「エゴーエイミ（わたしは～である）」をもって、その場に臨んでいることが3回繰り返されています。41節「わたしは天から降って来たパンである」、48節「わたしは命のパンである。」、51節「わたしは、天から降って来た生きたパンである。」です。

さて、43節、44節に戻りますが、つぶやいていたユダヤ人たちに、主イエスは「つぶやき合うのはやめなさい。44 わたしをお遣わしになった父が引き寄せてくださらなければ、だれもわたしのもとへ来ることはできない。わたしはその人を終わりの日に復活させる。」と語られました。30年以上も前に、開拓伝道で始まった東京の教会に、私自身も一人の牧師として夫と共に招聘されて赴任しました。その教会の開拓伝道を始められた牧師のご夫人の口癖が「イエス様が引き寄せてくださらなければ、だれもイエス様のもとへ来ることはできません。だから、イエス様が多くの人をお招きくださるように祈りましょう」という言葉でした。おそらく、もともとはこの聖書箇所から来ているのではないかというその祈りの言葉を思い出しました。そして、47節で主イエスは神のもとから来た御子の権威をもって、「はっきり言うておく。信じる者は永遠の命を得ている」と宣言されます。そして、ユダヤ人たちのつぶやきを吹き消すかのように再度、48節で「わたしは命のパンである」と重ねて宣言されたのです。続いて、49節で「あなたたちの先祖は荒野でマンナを食べたが、死んでしまった」と、旧約聖書の出来事を取り上げながらお語りになっていますが、その天から降ってきたマナと比較しながら、51節で「わたしは天から降って来た生きたパンである。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる」、言い換えるならば、「わたしこそ、天から降って来た生きたパンである」とお語りになったのだと思います。その主イエスを「食べる」とは、主イエスを天から降って来た命のパンとして信じるということです。主イエスの言葉を聞いてつぶやくのではなく、信じること、それが命のパンを食べることになるのだと思います。そして、「わたしが与えるパンとは、世を生きかすためのわたしの肉のことである。」と主イエスが、命のパンである御自身をお与えになると言われているのです。「わたしが与える」はもとの言葉を見ると未来形で記されています。これまで主イエスが「わたしは天から降って来た命のパンである」と言われたとき、それは過去のこと、すなわち御父が御子を人としてお遣わしになられた受肉の出来事を意味しておりました。けれ

ども、主イエス御自身がそのパンを与えるとお語りなるとき、それはこれから起こる十字架の出来事を指し示していると言われていました。そういうわけで、「世を生かすためのわたしの肉のことである」と言われるとき、その肉は、十字架の上で裂かれる体であり、流される血のことを指していると考えられます。

しかし、この言い換えによってユダヤ人たちの間の反発がますます大きくなった、ということが52節に語られています。ユダヤ人たちは、「どうしてこの人は自分の肉を我々に食べさせることができるのか」と言って激しく議論し始めたのです。そこで主イエスは非常に重要なことを語り出しました。53節から55節には「はっきり言うておく、人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたたちの内に命はない。54わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終りの日に復活させる。55わたしの肉はまことの食べ物、わたしの血はまことの飲み物だからである」。一見すると、異常に感じられるような話で、私たちが気持ち悪いと感じるだけでなく、ユダヤ人たちにとっては彼らの大切にしている律法の「血」に関する教えに反することでした。ですから、本日の聖書箇所後の60節には「ところで、弟子たちの多くの者はこれを聞いて言った。『実にひどい話だ。だれが、こんな話を聞いていられようか』」。とあり、ここまで主イエスに従ってきていた弟子たちの中にも、このことによってつまづいて去って行った者がいたことが記されています。しかし、この主イエスの肉を食べ、血を飲むというとてもないことこそ、主が備え与えて下さった聖餐なのです。聖餐のパンと杯は、十字架上で裂かれた主イエスの肉とそこで流された血を意味しています。聖餐に与ることによって私たちは、主イエスの肉を食べ、血を飲み、主イエスと一つとされるのです。56節、57節に「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、いつもわたしの内におり、わたしもまたいつもその人の内にいる。57生きておられる父がわたしをお遣わしになり、またわたしが父によって生きるように、わたしを食べる者もわたしによって生きる。」という深い関係が与えられることが、主イエスの言葉によって示されています。それが信仰者の歩みであり教会の歩みであるがゆえに、私たちは、本日のように猛暑の夏の日であっても、礼拝に招かれ続けまた礼拝に集い続けているのです。本日の主日礼拝には、聖餐式はありません。けれども、ヨハネによる福音書1章14節に「言は肉となって、私たちの間に宿られた。」と最初に宣言されているように、その「言」こそが主イエスなのであり、58節で主イエス自らが「これは天から降って来たパンである。先祖が食べたのに死んでしまったようなものとは違う。このパンを食べる者は永遠に生きる。」とお語りになった「命のパン」なのです。このことは、主日礼拝のたびごとにいつもわたしたちの前に示されており、「あなた方も離れて行きたいか」という主イエスの問いかけが反語的に迫ってきます。